

MACF 礼拝説教要旨

2022年7月3日

「イエス様は嵐の中で・・・」

ルカによる福音書 8章 22節～

8:22 ある日のこと、イエスが弟子たちと一緒に舟に乗り、「湖の向こう岸に渡ろう」と言われたので、船出した。

8:23 渡って行くうちに、イエスは眠ってしまわれた。突風が湖に吹き降ろして来て、彼らは水をかぶり、危なくなった。

8:24 弟子たちは近寄ってイエスを起こし、「先生、先生、おぼれそうです」と言った。イエスが起き上がって、風と荒波とをお叱りになると、静まって凧になった。

8:25 イエスは、「あなたがたの信仰はどこにあるのか」と言われた。弟子たちは恐れ驚いて、「いたい、この方はどなたなのだろう。命じれば風も波も従うではないか」と互いに言った。

この短いストーリーを自分の人生と重ねてみるとわかりやすいかもしれません。

行く先を決めているのは「イエス様」

舟を出し、しばらく行くとイエス様は眠ってしまわれました。

そこに突風、嵐。舟は沈みそうなほど、大騒動。弟子たちは慌ててイエス様を起こします。イエス様は慌てることもなく風と荒波を叱りつけると、凧になりました。

これをどのように重ねたら良いのでしょうか。

1) 神様の意図があるいのち

わたしたちは生まれたとき、自分では何もわかりません。

親の期待や願いはあると思いますが、いのちそのものについての意図は「神様のなか」にあります。

神様が「あなた」という存在をよしとされたのです。そして、さまざまな人生設計を私たちが考える前に、すでに神様は私たちが何かのこのために、あるいはどこかに向かって進ませてくださいます。

弟子たちは舟に乗り込み、櫓を漕ぎ、あるいはマストを操作して進みました。

作業はあるのです。

それはわたしたちの日常でも同じです。

生きるための様々な作業があり、成長のためのさまざまな仕事があります。それは怠るべきではないでしょう。神様は、それらも含めて、わたしたちをある方向へと進ませてくださいます。

2) 人生における嵐の存在

思いがけず、舟は嵐に遭遇します。

風と波が強くなり、自分たちでは舟を進ませることが難しくなり水が入ってきて舟が危うくなっていきます。

ある意味で防ぎようのない出来事とも考えられると思います。穏やかな日もあります。残念ながら人生の航路にはさまざまな苦難や試練が存在します。

しかも、心の用意の出来ていないときに、そういう事態に遭遇することが多いのです。

弟子たちは慌てます。

しかし、不思議なのはイエス様の弟子たちの多くは漁師でしたから、嵐には慣れていたでしょうし、舟の扱い方ももしかしたら太平洋をヨットで一人横断した

堀江健一さんと同じくらいよく知っていたと思うのです。にもかかわらず、ここでは彼らがまるで素人でもあるかのような声をあげます。

「先生、先生、おぼれそうです」

舟で漁をするとき、溺れないための訓練は最初にしてきたでしょうし、舟を守るか、命を守るか、とっさの判断の付け方もきっと学んできたと思うのです。ここでは「舟の心配」ではなく「自分の身の危険」を察知して「溺れそうです」と語っています。このままでは「溺れそうだ」「身動きが取れなくなり、苦しくて、窒息しそうだ」という状況が、悲しいことですが、わたしたちの人生にたびたび訪れることがあります。

溺れた経験、ありますか？

「溺れるもの、藁をもつかむ」という格言がありますが、何でも手あたり次第、自分の命綱になりそうなものを探し、探してもがくのです。完全な孤立無援感を感じます。弟子たちはひとりひとりが、個人個人で、溺れそうだと感じ、孤立無援の雰囲気の中でどこにすればよいのだろうと感じているわけでしょう。

頼れる存在、頼りにできそうな人、悩みを共有し、共感してくれる人が見当たらないとき、それがどんなに弱い嵐に思えても、わたしたちは「おぼれそう」な気分になります。しかも、基本的には「平凡、無風、順調」が普通だと考えて生きているわたしたちにとっては、どんなに小さな嵐でも大問題に感じます。そして、恐れがどんどん心の中で大きくなっていくのです。

思うに、これはわたしたちの「現状ありのまま」のすがたと重なると思います。

「あれがない」「これが足りない」「あの人が返事をくれない」「なかなか連絡がとれない」だけで「溺れそう」な気分になりえます。思い通りに進まないだけのことで、なんだか嵐に遭遇したような気分になることさえあります。そして不安と恐れが心を満たしてしまうのです。

恐れと不安と孤立意識。

これがわたしたちの中で「人生の嵐」を拡大させる鍵となるものです。

3) あなたの信仰は

眠っていたイエス様は弟子たちに起こされ、風と波に向かって鋭く叱りつけます。

すると嵐がやんでしまうのです。

そして、弟子たちにこう質問します。

「あなたがたの信仰はどこにあるのか」

そんな事言われても、怖いものは怖いし、不安な時は不安になるわけですが、この場面でのイエスさまの質問の意図はなんなのでしょう。

嵐があっても恐れるなということではないと思います。死ぬ気で頑張れという意味でもないと思います。

その舟のなかに「行く先を知っているイエス様がいる」ということに気づくように。

嵐のひどくなる前に、その予兆が見えるまえに、イエス様に伝えておけなかったのかという問いかけのように感じます。

「ここまでは、大丈夫」「この程度なら大丈夫」という考え方ではなく「大丈夫だと思いますが、イエス様に報告しておきます」という進め方が教えられているように思います。

「溺れそうだ」と感じる前、「嵐がひどい」と感じる前、「嵐がやってきた」と感じる前に、「イエス様、嵐が来そうですが、どうしたら良いでしょう」という報告をしておくこと。

つまり、一日が始まったその時から、今日は何が待っているかわかりませんが

どうぞよろしくお願ひしますと、一日全体をイエス様に委ねるといふか、まな板の上に載せて、イエス様と相談しながら進めていく姿勢が重要なのです。

嵐はきます。

悩みや恐れもやってくるでしょう。

孤立無援を感じることもあると思います。

しかし、その根底に「救い主イエス様に知られている」といふことがあると、心の安定度が変わってくると思うのです。

信仰は「日々のイエス様との歩み」の中で養われていきます。イエス様への祈りは、いわゆる高速道路の緊急電話ではないのです。

繋がりを続けている「ライブ配信状態」なのです。

今日から、今から、イエス様との関係はライブ配信状態なのだと思ひ、イエス様を意識できたら良いと思ひます。

そして、おりあるごとに言葉で伝えて行くのです。

喜びも悲しみも寂しさも辛さも。

イエス様に、なんでも、言葉で伝えてみてください。

それができるようになると、きっと弟子たちの驚きの言葉を一緒に味わえるようになるでしょう。

「いったい、この方はどなたなのだろう。命じれば風も波も従うではないか」

この驚き、感動は、わたしたちの日々の生活の中で味わえるのです。

無事に今日を迎えることができただけでも、この言葉に共感できます。

この出来事はあなたに何を語っていますか？

何を感ひしますか？

8:22 ある日のこと、イエスが弟子たちと一緒に舟に乗り、「湖の向こう岸に渡ろう」と言われたので、船出した。

8:23 渡って行くうちに、イエスは眠ってしまった。突風が湖に吹き降ろして来て、彼らは水をかぶり、危なくなった。

8:24 弟子たちは近寄ってイエスを起こし、「先生、先生、おぼれそうです」と言った。イエスが起き上がって、風と荒波をとお叱りになると、静まって凧になった。

8:25 イエスは、「あなたがたの信仰はどこにあるのか」と言われた。弟子たちは恐れ驚いて、「いったい、この方はどなたなのだろう。

命じれば風も波も従うではないか」と互いに言った。

「MACF 礼拝映像」はこちらです。

<https://youtu.be/ZHPEBOnqdcM>